歎異抄

底争
、得
聊入竊
注易回
之行愚
。一案、
偏門
為哉粗
散。勘
同全古
心以今、
行自
者見歎
之之異
不覚先
審悟師
也、口
云莫伝
々乱之
他真信、
力之
宗思
旨有
。後学
仍、相
故続
親之
鸞疑
聖惑、
人
御幸
物不
語依
之有
趣縁
、知
所識
留者、
耳

しなか異
るかでな
すれかるひ
。。易こそ
ひよ行とか
とつのをに
へて一歎愚
に故門き案
同親に、を
心鸞入後回
行聖る学（
者人こ相め
のの と続ぐ）
不御をの
審物得疑ら
を語ん惑し
散のや有て
ぜ趣。るほ
ん（おもむき）、
がためなり
と云々

一
と
お
弥
陀
の
誓
願
不
思
議
におたすけられまいらせて、摂取不捨生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんまたも重深の
ぐ要煩願
るに悩に
ほあ熾は
どら盛老
のずの少
の悪、衆善
な念生悪
きが仏をの
ゆにたひ
えますと
さけをる
にるんえ
とべがら
云きたば、
々善めれ
なのず
き願。わ
ゆにた
えてだ
にま信
。し心
悪まを
をす要
も。と
おしす
そかと
るれし
べばる
か本べ
ら願し
ずを。
、信そ
弥ぜの
陀んゆ
のにえ
本はは
願、、
を他罪
さの悪

信うん善のもが
じろや導本そ
たう。の願う念
てか法御まら仏
ま。然釈こわを
つ詮の、とめも
らずお虚に。う
んるお言おいし
ととせしわずて
もこまたしれ、
、ろこままの地
ま、とうさ行獄
た愚なべばもに
す身らか、おも
てのばら釈よお
ん信、ず尊びち
と心親。のがて
もに鸞善説たそ
、おが導教、き
面きもの虚身らは
々てう御言なわ
のはす釈なれば
御かむまるばこ
はくねこべ、そ
かの、とかと、
らごまならてす
いとたらずもか
なしもば。地さ
り。っ、仏獄れ
とこて法説はた
云の、然ま一て
々うむのこ定ま
えなおとすつに
はしおにみりな
、かせおかてる
念るそわぞ、べ
仏べらしかとか
をかごましいり
とらとさ。うけ
りずなば弥後る
てそら、陀悔身
、てまよよ学しにう

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。
善
人
な
お
も
て
往
生
を
と
ぐ
、
い
わ
ん
や
悪
人
を
や
。

往た死たる力な
生めをてあのお
すなはまい意往
れれなつだ趣生
、ばるれ、にす
ま、るば弥そ、
し他こ、陀むい
て力と真のけか
悪をあ実本りに
人たる報願。い
はのべ土にそわ
とみかのあのん
、たら往らゆや
おてざ生ずえ善
おまるを。は人
せつをとし、を
そるあぐか自や
う悪わるれ力。
ら人れなど作こ
い、みりも善の
きもた。、の条
き。っま煩自ひ、
とい悩力と一
もて具のは旦し
往、足こ、そか
生願のこひのる
のをわろといを
正おれをえわ、
因こらひにれ世
なしはる他あの
りた、が力るひ
。まいえをにと
ようずしたにつ
っ本れてのたね
て意の、むれに
善、行他こどい
人悪に力こもわ
だ人てをろ、く、
に成もたか本
こ仏、のけ願悪
その生みた他人

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。
慈
悲
に
聖
道
・
浄
土
の
か
わ
り
め
あ
り
。

四
慈
悲
な
く
て
は
、
人
倫
の
道
理
も
す
べ
て
成
ぜ
ず
、
恩
愛
の
別
れ
に
つ
け
て
も
悲
しみ
の
涙
を
流
す
ば
か
り
な
り
。
し
か
れ
ど
も
、
世
を
捨
て
て
出
家
し
て
仏
道
に
入
る
ほ
どの
者
は
、
恩
愛
の
情
け
を
か
へ
り
みず
、
無
為
の
境
地
を
願
ひ
、
煩
悩
の
束
縛
を
断
ち
、
欲
愛
の
絆
を
離
れ
ぬ
べ
き
ことわり
なり
。
しかるに
、
恩
愛
の
絆
を
離
れ
ず
して
、
無
為
の
境
地
を
願
ふ
ほ
どの
者
は
、
慈
悲
の
心
を
本
とす
べき
ことわり
なり
。
されば
、
慈
悲
の
なき
を
ば
、
仏
道
に
入
る
とも
、
慈
悲
の
なき
ゆ
へに
、
仏
の
御
ま
へ
にも
参
ら
ず
、
菩
提
の
道
にも
入
らず
、
三
界
の
内
にも
とど
まら
ず
、
六
道
の
巷
にも
迷
ふ
べ
き
なり
と
云
々

親鸞は父母の孝養のためとて、一辺にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。
親
鸞
は
父
母
の
孝
養
の
た
め
と
て
、
一
辺
に
て
も
念
仏
も
う
し
た
る
こ
と
、
い
ま
だ
そ
う
ら
わ
ず
。

次の五
生ゆ
親
ら念にえ
き仏仏は
なをに
ば回な一
、向り切
六して の
道て、有
四、た情
生父すは
の母け、
あをそみ
いもうな
だたろも
、すうっ
いけべて
ずそき世
れうな々
のらり生
業わ。々
苦めわの
に。が父
したち母
ずだか兄
め自ら弟
り力にな
とをてり
も すは。
、てげい
神てむず
通、善れ
方いにも
便そてい
をぎもず
も浄それ
っ土うも
てのら、
、さわこ
とばの
まず
りこ順そ

有縁を度すべきなりと云々

もも如きりあとの六
しあ来て。ずにほ
るるよ、つか念か専
べべりひくっ仏の修
きかたとべてを子念
ならまにき、も細仏
りざわつ縁念うなの
とるりれあ仏さりと
云こたてれもせ。も
々とる念ばうそ親が
な信仏としう鸞ら
り心すもそらはの、
。をれなうわ弟
自、ばいろば子わ
然わ、、うこ一が
のが往はひそ人弟
こも生なと、もも子
とのするを弟もひ
わがべべ、子たと
りおかきわにずの
ににら縁がてそ弟
あ、ざあ弟もう子、
いとるれ子そろう と
かりもばとう
なかの、もら。い
わえなはうわそう
ばさりなすめの相
、んなるこ。ゆ論
仏とんるとひえの
恩もどこ、とはそ
をういときえ、う
もすうのわにわろ
しにこあめ弥がう
りやとるた陀はら
り、。、をるのかん
まか不も荒御らこ
たえ可、涼もいと、
師す説師のよに、
のがなをこおても
恩えりそとし、っ
をす。むなにひて

七
敬
伏
きし
ゆ
魔
界
、外
無道
碍も
の障
一碍
道す
なる
りと
云々

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇こも
罪悪も業報も感ずることあたわず、諸善もおよぶ
なし。

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行
非善なり。

念仏は無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」

八
は
な
れ
た
る
ゆ
え
に
、
行
者
の
た
め
に
は
非
善
な
り
と
云
々

う
か
ら
ず
ば
、
自
力
と
い
う
。
ひ
と
え
に
他
力
に
し
て
、
非
行
を

十
九
土
へ
ま
い
り
た
く
そ
う
ら
わ
ん
と
お
ぼ
え
そ
ら
ん
じ
て
、
「
な
ん
じ
、
い
か
に
と
そ
う
ろ
う
べ
き
こ
と
に
て
そ
う
ろ
う
や
ら
い
な
し
。
な
ん
ぢ

十三　弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ぼこり

往生こころよき業とにうきあゆこえなろうのべおか願ら信ずとりるい。おうこと故聖人のお善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のなはり。

かこ業をばらえずるかい」と、おおせのそうらいしあいだ、「さんぞうろう」と、もうしたがうまじきか」と、おてそうらいしかば、「たとえば、おおせにてはそうらえども、一人もしかあらいそはつわみらがいい宿か

しんばとにうゆこなろのか、をばらえずとりるい。おうこと故聖人のお善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のなはり。

一しかこ業らよ往十
たんばとにうき生三
ばとて、をあゆこか
、をばらえなろ弥
「さらば、信ずとりの陀
おおせのそうらいしあいだ、「卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるべし」とそうらいしあいだ、「唯円房はつわみのはり。

ばば、いわんことたがうまじきか」と、おおせのそうらいしかば、「たとえば、おおせにてはそうらえども、一人もしかあらいそはつわみらがいい宿か

領状もうし、おてそうらいしかば、「たとえば、おおせにてはそうらえども、一人もしかあらいそはつわみらがいい宿か

すべし」おおせそうらいしとき、「おおせにてはそうらえども、一人もしかあらいそはつわみらがいい宿か

せんぞうろう」と。「これにてしるべし。なわち、こなにろすごべしもこかあらいそはつわみらがいい宿か

ばば、「さのらいそはつわみらがいい宿か

身ばだうわみらがいい宿か

往ばらがいい宿か

生ついいい宿か

器はつしう宿か

量はつしう宿か

ばかりのちからましますとしりてか、これこそ、他力にてはそうらえ。」とのたまえり。

ばこれこそ、他力にてはそうらえ。」とのたまえり。

ばよきことも、あだしけかよ。」とのたまえり。

きことも、しけかよ。」とのたまえり。

ことも、きるらう。」とのたまえり。

とも、ずに聖。」とのたまえり。

、人おを。」とのたまえり。

なとりを。」とのたまえり。

おなとりを。」とのたまえり。

おなとりを。」とのたまえり。

おな

ろんは、自力のこころにして、臨終正念といのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてそうなり。

くあくだてひ三を碍き行あ簡生乗こ十
とわ生まぞら十ものぬ恵い善ののと五
なれ死る　く二っ光る解だ悪開所に
らにをと弥本相て明もと、の覚説そ煩
いそばき陀と・さにのも真法は、う悩
そうへにのは八と一なに言な他四ろ具
ろろだ、心も十り味らな・り力安う足
うてひ光う随をにばし法。浄楽。の
をそと摂し形ひし、と華お土の即身
ぞやうた護そ好らて煩いをおの行身を
」。ろびしうをく、悩え行よ宗の成も
とう摂てらもと一のどずそ旨感仏っ
ここぞ取　え具そ切黒もる、、徳はて、
そ、かしな。足うの雲、浄今信な真、
、して が『和しろ衆は弥侶生心り言す
故。すく讃て う生や陀、に決。秘で
聖かて生』、なをくのなお定こ教に
人のた死に説る利は願おいのれのさ
のまをい法ひ益れ船もて道み本と
おごわへわ利とせ、にてはなな意り
おざだく益はん法乗順、る難、を
せれて「そ、と性じ次煩が行三ひ
にばけ金う釈きのて生悩ゆ上密ら
はる剛ろ尊に覚、の悪え根行く
そを、六」堅うのこ月生さ障なの業と
うさ道（善固にごそす死とをりつのい
らとに導のやと、みのり断。と証う
いる輪讃）信。くさや苦をぜこめ果こ
しと回）心こ、とか海いんれ、なと。
かはす　とのれ種りにをのこま観り。
。いべは　を種にあわるとた念。こ
いかそさこのてらた。、易成六の
まらうだそ応はわりいき行就根条
ぎずらま、化それ、かわ下の清、
さら。える今のうて報にめ根さ浄も
かしばと生身ら、土いてのとはっ
すか、きにをえ尽のわあつりまて
べれ信をさも。十きんりとなたの
きば心まと現こ方しやがめり法ほ
やなのちりじののに、た、。華か
ら。がさえを、身無つ戒き不来一の

うてれれべてにうずけまののもか他専い十
ろましそとしも、けれんすおいうら力修て六
うしう弥。、はんととべものしず真の口
よまろ陀すいかこおいきいちそと宗ひ論信
しすうのべよらともうにこにはうおをとを心
、。。御ていわ、う願やも、らもしにもの
うしこ恩よよれもほ、。住いえいらおし行
けかれのろ願まっど不くせず。てざいて者、
たる自深ず力いとに思ちざる一、るては、
まを然重のをらも、議にらい切もひは、自
わ、ななこあせな願にはんきのとと、か然
る自りるとおてげ力ま願さ、事の、回なに、
。然。こにぎすきをし力きいにこ弥心ら、
あとわとつまるおうまをにる、こ陀とずは
さいが、けいこもたすたいいあろのい回ら
まうはつてらといがとののきしを智う心を
しこかね、せなたいいみちをたひ慧こすも
くとらは往ばれま、うたつまゆきをとべた
そのわお生、ばう他とてきたうかた、して、
う別ざもに自、べ力もまなずべえまたと、
ろにるいは然わきを、つばしにてわだいあ
うあをい、のがこたさる、て回、りひうし
なる、だかこはとのすと摂お心本てとこざ
りよ自ししとかなみがい取わし願、たとま
。う然まこわらりまよい不るてを日び。な
にといきりい。いかて捨こ、たごあこる
、もらおにな信らら、のと往のろるのこ
わうすもてる心すんこ誓な生みのべ条と
れすべい、べさるもこ願れをまこし、を
もなしを柔かだこのろはばといこ。断も
のり。具和らまこをに、、げらろそ悪おし
。しせ忍ずりろこはむ回そすにの修かり
こかず辱。なかそ、な心うるて回善し、
がれれしのわばけ、さしもろをは心の、
おすばてころ、てたこくせうこ、はこ同
にな念、こか往、すそなずべそ往、こ朋
いわ仏たろら生辺け悪ら、く、生日ち同
うちもだもんは地た人せ柔は回かごか侶
ひ他もほいに、のまをお和、心なろ。に
と力うれでつ弥生わたわ忍ひとう本一も
そにさぼくけ陀をんすし辱とはべ願向あ

十七
文
十
六
修
力
心
ば
ず
ば
ば
ば

善信房あてに送られた法然聖人の御弟子七人流罪、また御弟子四人死罪におこなわるるなり。聖人は土佐国へ流され、親鸞は越後国へ流され、親鸞は藤井元彦男云々、生年三十五歳なり。善恵房遠信房円心房親鸞と同備後国、後鳥羽院御宇、法然聖人他力本願念仏宗を興行せらるる。

一、親鸞一人がためなりけり。

聖人少々なぬきのつねいえをるくのの、このとごちは、聖人のおおせのそうろうほどにこそ、あいともなかりてそうらえども、親鸞の御信心にひとつなり。

二、親鸞位を改法然聖人の儀賜長房俗名沙仏、非僧非俗。然間以禿字為姓被経奏問畢。彼御申状、于今外記庁納

三、親鸞僧尼の敵奏之上、御弟子中狼藉後鳥羽院御宇、法然聖人無実風聞他力本願念仏宗を興行せらるる。

四、親鸞住吉社神主周防入道西阿、善綽房性願、善恵房遠信房、善綽房、住蓮房、安楽房、浄円房、幸西成覚房・善恵房、以上八人なり。

流罪に処せられ、親鸞は土佐国へ流され、親鸞は藤井元彦男云々、生年三十五歳なり。

流罪に処せられ、親鸞は藤井善信と云々。

流罪に処せられ、親鸞は藤井善信と云々。

流罪に処せられ、親鸞は藤井善信と云々